

Title	<研究論文> 『カリキュラムのための指針 (歴史・地理・社会分野)』 : イタリアにおける歴史教育・地理教育の現状
Author(s)	徳永, 俊太
Citation	教育方法の探究 (2010), 13: 25-32
Issue Date	2010-03-31
URL	https://doi.org/10.14989/190366
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

【翻訳】

『カリキュラムのための指針（歴史・地理・社会分野）』

——イタリアにおける歴史教育・地理教育の現状——

徳 永 俊 太

はじめに

本稿は、イタリアの教育・大学・研究省(Ministero dell'Istruzione, dell'Università e della Ricerca)¹が2007年に公布した『カリキュラムのための指針』(Indicazioni per il curriculum)のうち、下記の図に示す第一サイクル(義務教育期間)のもの²の中から歴史・地理・社会分野(Area Storico-Geografico-Sociale)を翻訳したものである。

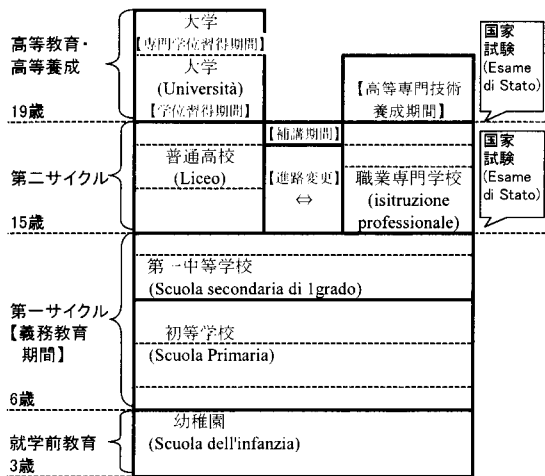


図1 イタリアの公教育制度

出展：教育・大学・研究省のHPをもとに筆者作成

歴史・地理・社会分野

序文

歴史・地理・社会分野は、空間と時間の中で人間社会の研究に従事する科学によって構成されている。歴史(La Storia)、地理(la Geografia)、そして社会科学(le Scienze sociali)は、それらの中で密接に関連しあい、初

等と中等の間での継続性も持っている。

その中では、社会科学と関連したテーマに別れている。それらの目的は、社会的に活発で空間的に多様な現代性と同時代性に関する問題について、初等学校の教員においても構造化された道筋を構築可能にすることである。この分野における中心的な目標の一つが活動的な市民性(cittadinanza)に関連するコンピテンスの発達であるが故に、現代社会において恒常的に開かれているということは必要となるのである。すなわち、社会における共生のためのルール的重要性とそれを遵守する必要性の理解、人間の権利を保障することによって組織された領域コミュニティの一部であるという自覚、憲法の基本的な原理と国会体制の主要な様相についての知識、国際会議によって承認された人間の権利に関する知識である。

他の面では、古代社会との継続的な関係を、歴史遺産、芸術遺産、文化遺産の学習によって保障していく。第一中等学校においても、こうした手段によって先史時代と古代の重要性を取り戻すことが可能になる。

歴史・地理・社会分野は、他の教科との連携に対して開かれている。実際、この分野では、他と全ての教科と共有する日常、数字、芸術の言葉に加えて、地理的な言語を活用することを生徒は学ぶ。それは、視覚・空間的な理解の図式的な表現である。続いて、領域的なシステムと歴史/社会的な現象の記述と解釈のために、図表とモデルを使うことを学習する。

教授・学習過程は、生徒を参加させながら自問自答させるものとして着想され、現代性固有の問題と重要な知識を根に持つ。それは、学習過程の出発点と到達点として、生徒の知識と経験を考慮にいれるのである。それは、多様化した道具によって発展する。すなわち、教科書、多様な種類の資料、地図帳、一般向けの歴史

テキストと科学的な歴史テキスト、マスメディア、マルチメディア、環境と領域、歴史／芸術遺産である。この形成過程において、講義および伝統的な教材・教具は、伝統的というよりは最近のものである、しかし同等に例と「よい実践」が豊富なラボラトリーとの時間と組み合わせられる。合意と参加に基づくこの教授・学習によって、生徒が専門的・科学的な作業の成果を評価できるようにするのである。そうすることで、国、ヨーロッパ、世界の歴史は今日の社会生活における問題を理解し、それと対峙するのを助けるものであることを、生徒は気付くのである。

歴史科(Storia)

序文

歴史科の目標は、過去自身が私たちに残してくれた証拠と遺物を研究することから始めて、人間の過去を理解・説明することである。歴史的な知識は、観点と多様な方法論上のアプローチ（歴史学的、考古学的、地理学的など）との絶え間ない対話を通して、形成・発展するものである。生徒にイタリア、ヨーロッパ、世界の歴史の形成過程を知らせ、歴史的な記憶と国による遺産がどのように形成されたのかを理解させるが故に、歴史科の学習は国の市民教育に貢献することになる。同時に、資料と得られた知識を解釈する能力に基づいた「批判的習性」の形成を、歴史科は生徒の中にもたらすのである。

近年、実際には、過去、特に記憶、アイデンティティ、起源に関するテーマが、公共の論点と歴史におけるメディアを強く特徴付けてきた。このような文脈において、歴史・社会科学の批判的な道具を使いこなすことは、歴史が手段として、もしくは適切でない形で使われることを避けることができる。さらに、多民族・多文化社会の形成は、それ自身とともに、歴史科を研究としての教科から多様なアイデンティティの表現の場に変質させる傾向を伴っており、それは科学的な特徴を損ない、カリキュラムの形成効果を減ずる危険性をも伴っている。このような理由から、まさに歴史は、人類という単一性から出発して、この惑星に住むようになった人間集団の多様性を論じるためのしっかりとした基礎を提供するものだ、と強調するのが適切である。この領域では、様々な場所に由来を持つ

全ての生徒にとって不可欠な知識に関する問題の論述が中心となる。すなわち、新石器時代から産業革命へ、領域の歴史からグローバル化の進展の歴史である。

さらに、イタリアとヨーロッパの歴史に関する本質的な事実に対して批判的な論述をすることは、この文脈では非常に望ましいことであるし、多分化・多民族社会の多様な構成員間の対話に到達するための有用な基礎を構成し、アイデンティティと異文化というテーマにおける晴れやかで教育的な論議に向けて学校を開かせることができる。

実際に、ヨーロッパとイタリアの歴史は、定住が始まったもっとも古い段階から、人間と文化の絶え間ない混合を見せてきた。その原動力は、その発展 - 原始時代の最初の組織された社会から、ギリシャとフェニキアによる植民地化、ローマ帝国によって実現された地中海の統一まで - において、地中海世界の人々とヨーロッパ大陸の人々、アフリカ大陸の人々によって確立された深い交錯として理解することができる。中世に関する最近の研究は、開放的で包括的な社会の形成を証明しており、その中では多様な文化と民族の貢献によって、封建制度や近代国家に比する、特に効果的な領土の政治体制が出現した。このような基盤の上に、中世と近代の都市が発達し、キリスト教文明の誕生・流布から人文主義とルネッサンスの登場、科学革命と啓蒙主義の文化人といった、最初にヨーロッパで、次に世界で起こった事件が発展したのである。

このような点において、インドや中国と同様に、ヨーロッパは非常に個性的な経済・文化圏を形成し、時には平和と交易、時には暴力と征服が行われた近代世界と現代世界の発展性によって特徴付けられたのである。それ故に、私たちの社会において自らを対処するためには、この歴史の基本的な様相に関する知識が必要不可欠となる。このような様相の中から、1800年代における国家の形成の重要性、特別な関心とともにイタリア国家の形成の重要性が強調される。このような歴史を学習する方法は、現代という次元にまると押しつぶされている問題に対する歴史的な基礎を構築する機会を生徒に提供する。過去と現在という二つの極は、カリキュラムの中で同じような重要性を持つべきであるし、継続的に言及されることが好ましい。

しかしながら、現代世界の分析は、教育的に重要な

分野である。世界大戦、ファシズム、共産主義、自由民主主義、脱植民地化、経済・社会・政治・文化の複合的な変遷が、現在の世界を特徴付けている。市民性、現在の世界の複雑性の中で自らを対処する能力、未来を構築する能力といった目標を達成するという観点から見たとき、EU の誕生、イタリア共和国の誕生と変遷は決め手となると考えられるべきである。こうした理由から、カリキュラムの最後の学年は、1900 年代の歴史の学習のために確保される。

歴史の複雑性は、カリキュラムの逃れられない背景である。それは、複雑性を構成する主体の多様な性質（性、財産、社会的集団、宗教、国家など）にも由来するし、個人の国際的な介入にも由来するし、規模や視点の多重性にも由来する。これらから出発することによって、複雑性は再構築されるのである。複数の教育方法は、教育の多様な手段として実践されるものであり、教科の特徴と合致した回答のように思われる。生徒は、社会と対峙すること、時間的・地理的な広がりを持つ事実を学習することを学ぶ。時期を理解するために、伝記や寓話を読む。戦争や経済サイクルの動きを発見するために、あるいは学習した知識に体系性を与えるために、歴史上の出来事を学習し、年代順の記述を使うことを習得する。本から学ぶと同時に、具体的な要素を直接観察することからも学ぶ。城壁、広場、工場、教会などである。いかなるときも、多様な時間的・空間的な尺度を学習・活用しなければならない。

この複雑性のために、多様な学習段階に適した活動と知識の進展が分かり、初等学校から第一中等学校の間の様々な学習課題を提供するような整理された過程の表現が、この教科には求められるのである。最初の教育段階においては、歴史的な思考の基礎となる概念の形成に気を配り、近くで実行できるような地域史の様子に触れつつ、生徒が理解・利用できる形で提示できるのであれば、先史時代から私達の時代までの時間的・空間的に遠い歴史の事実や話にも触れる。何千年におよぶ伝統の中で、子どもが過去の知識に近づくために貴重な資源となる魅力的な話を、歴史学は積み重ねてきた。歴史の体系的・通事的な知識は、初等学校の最後の2年間と中等学校の最後の間で実現される。先史時代、原史時代、古代世界の社会における社会的、

文化的、物質的な生活の様子に子どもを引き付けることに焦点を合わせることから始めて、生徒の能力が上がるにつれて、より複雑な過程を伴う学習へと進んでいく。初等と中等を区切るのは、西洋におけるローマ帝国の崩壊になる。一方で、第一中等学校の最初の2年間では、古代末期から1800年代末までを扱う。

初等学校修了時におけるコンピテンンス発達の到達点

生徒は自身の生活領域における過去の重要な要素を知る。

先史時代、原史時代、古代の基本的な側面について知る。

事実や時代を配置するために、時間の線を使う。

ギリシャやローマのといった学習した社会について知り、人間のグループと空間的な文脈との関係を特定する。

簡単なカテゴリー（食物、保護、文化）をテーマ化して使用し、知識を組織する。

簡単な歴史のテキストを生み出し、提示された歴史のテキストを理解する。教師の指導の下に、地理・歴史のカードを使い、情報処理の道具を使い始める。

学習した事実を語るができる。

現在居る領域の歴史的な足跡を認識し、芸術遺産と文化遺産の重要性を把握する。

初等学校3年生の修了時における学習の目標

情報の組織

- 活動と体験した事実・語られた事実を図と言葉を使って表現する。時間の持続を定義する。時間の計測のための取り決められた道具の機能と使用方法について知る。
- 連続の関係および同時代性の関係、時間の周期、変化、事象における永続、経験について知る。

歴史資料の使用

- 足跡を特定し、それを個人の過去、家族の過去、所属する共同体の過去に関する知識を抽出するための資料として使用する
- 地域やそうでない過去のいくつかの時期における簡単な知識を、多様な資料から抽出する。

概念的な道具と知識

- 歴史の基本的な概念の構築に到達する。家族、グループ、ルール、農業、領域、生産など。
- 重要な社会の見取り図の中で獲得した知識を組織する。(社会上の生活、政治上の生活、経済上の生活、芸術上の生活、宗教上の生活など)
- 空間・時間において距離のある多様な歴史・社会の見取り図の間にある類似と相違を特定する。

生産

- 線描の駆使、物語ること、線画などを使い、学習した知識と概念を表現する。

初等学校の5年生修了時における学習の目標

歴史資料の使用

- 歴史的な事象を理解するために有益である多様な性質を持つ歴史資料から情報を抽出する。
- 歴史・社会の見取り図の中に、今生きている領域の過去の形跡と証拠を関連づけて表現する。

情報の組織

- 学習した文明の歴史の見取り図を比較する。
- 学習した知識を表現するために、年代順の記述と歴史／地理のカードを使用する。

概念的な道具と知識

- 西洋の時代区分(キリスト誕生以前・以後)に基づいて、年代順の記述を使う。その他の年代順の記述に関するシステムを理解する。
- 特徴的な要素間の関係を際立たせて、学習した社会の総括的な叙述を起草する。

生産

- 現在との関係も捉えつつ、学習した多様な社会の特徴的な様相について比較する。
- グラフ、表、歴史カード、図像の証拠から情報を抽出・生産し、教科書やそうでないものといった多様な種類のテキストを検討する。
- 学習した主題を、口述もしくは筆記で、話の形に起草する。

第一中等学校の修了時におけるコンピテンツ発達の到達点

生徒は、過去の知識に対する興味をより持つ。自主的に、歴史的事実と問題を調べる。

定住の形成、中世権力の形成から統一国家の形成、共和国の形成というイタリアの歴史における基本的な時期を知る。

中世、近代、現代ヨーロッパの基本的な経過について知る。

新石器時代の文明化から産業革命、グローバル化という世界の歴史についての基本的な経過を知る。

自分の環境に関する歴史の基本的な様相について知る。

イタリアと人間社会の文化遺産という側面を知り、評価する。

個別の学習方法を作り上げ、歴史的なテキストを知り、様々な種類の資料から歴史的な情報を抽出し、それらをテキストの中で組織する。

得た歴史的な知識をつなげあうことにより説明することができ、自らの考察を論述することができる。

現在の複雑性の中で対処をし、多様な文化や意見を理解し、現代世界の基本的な問題を理解するために、知識と能力を使用する。

第一中等学校3年生修了時における学習の目標

歴史資料の使用

- 定められたテーマに関する知識を抽出するために、様々な種類の資料を使用する。(文書資料、図像資料、物語体の資料、物質的な資料、口述資料など)
- 考古学に関わるような場所、図書館、古文書館において作業する際のいくつか手順や技術を理解する。

情報の組織

- 集めた情報を基にして、問題を表現する。
- 学習した知識を組織するために、空間・時間のグラフと地図を構成する。
- イタリア史、ヨーロッパ史、世界史との関係において、地域史を位置付ける。

概念的な道具と知識

- 地図、見取り図、表、グラフを用いて、情報を選択・整理・組織する。
- 学習したイタリア・ヨーロッパ・世界の歴史的時期における様相と構造について理解する。
- 学習したテーマに関する文化的遺産について理解する。
- 環境問題、文化交流の問題、市民集団の問題を理解するために、学習した知識を使う。

生産

- 教科書とそうでないものの多様な情報の資料から選択・整理された知識を利用して、テキストを生産する。
- 学習した主題を口頭で伝える。

地理(Geografia)

序文

地理学は、私達の惑星が人間のものになったこととそれに伴う自然との関係において共同体が行った活動の経過を研究する科学である。時間上のこうした経過は、環境を変化させ、領域を「形成」し、私たちはその中で生きている。自然の歴史と人間の歴史は、異なった時間とともに発展してきた。自然の長い時間は、それよりも極端に短い人間の時間と交錯する。新しい文化的見地や技術革新の成功による非常に早い変化の結果として、激しいリズムになることもある。

こうした理由から、地理学は現在を注視し、多様な空間の繋ぎ目と人口統計的、社会-文化的、経済的様相の中で研究を行っている。しかし、空間は安定状態にはないので、地理学は時間という次元を捨象できないし、その領域に証拠を残した事実を読解・解釈する可能性を扱うことも捨象できないのだ。初等教育の最初の学年においては、近くを意識的に探検することを通して、周りの環境を知覚するアプローチが重要である。この段階においては、体と空間の関係を確立するために、地理は運動科学との強い連携の下に作用する。自らの地理を構築した後は、文化的な責任者（家族、教師、証人、特権者）の役目における大人の証拠を利用することで、初等学校の最後の2年間から第一中等

学校の3年間の間に、生徒は教科の体系的な次元に徐々に近づくことができる。特に地理には、時間的感覚のすぐそばで空間的感覚を獲得させるという課題が割り振られている。領域において自らを位置づけるために、生徒は空間的な座標を備えている必要がある。初等学校の終わりまでには、地域的な状況から始まって、世界の状況に到達できるよう、自らの空間的状況の中で各要素を分析する習慣を身につける必要がある。地域の現実と世界の現実との比較、もしくはその逆は、多様な尺度で読解・解釈された空間の継続的な対比を用いること、地図、航空写真、衛星の映像を利用することで可能になる。

地理が提供できる放棄し得ない形成上の他の機会とは、多様な視点から現実を観察する習慣を身に付けさせることである。それは、地球上には中心はなく、むしろ中心は無限にあると仮定するところから始まる。こうした観点において、知識の中や多岐にわたる自然、領域、人間の比較の中だけではなく、市民性、文化交流と言ったテーマ、そして連帯感、他人への配慮と容認、人間・社会・文化の統合といった価値観を内在化させることも、地理の貢献によって成し遂げられる。

先人から受け継いだ文化遺産は、その多様性において領域における価値ある「痕跡」となり、それに対する配慮は、地理が歴史および社会科学と強い連携を持つという目標になる。これらの教科とともに、次の世代が回復できない資源の中から有毒でもなく使い果たしてもいない自然を利用できるように、地理は自然遺産の保護と回復を行う企画をも共有することになる。ゴミのリサイクルと廃棄、汚染との戦い、新しいエネルギーを生産する技術の発展、生物多様性の保護。地理的な重要性を持つこれらのテーマでは、他の科学的・技術的教科と連携することも重要である。領域と発達の学習では、システムの負担の範囲内で維持できるように、人間や住民の要求と両立できるのかに焦点を絞ることになる。

学校において地理を実践するということは、自覚的で、自主的で、責任があり、批判的である世界市民を形成することであり、そのような世界市民は領域と同居することができ、未来を見つめながら創造的・持続的な方法で領域を変えていくことができるのである。

初等学校修了時におけるコンピテンス発達の到達点

生徒は周りの空間と地図上で、空間を認識する基準と四方位基点、座標軸を利用しながら、自らの位置を確かめる。

地理的な空間は、関連もしくは相互依存という関係で結ばれた自然の要素と人為的な要素によって構築された領域システムであることを了解する。

(山地、丘陵地、平原、海岸、火山などの)地形の特徴的な要素を、特にイタリアのものに注意を払いながら、特定し、知り、記述する。

イタリアにおける基本的な地理の自然の「対象」(山、川、湖など)と人為的「対象」(都市、港と空港、インフラなど)を知って、突き止めることができる

地図を解釈し、簡単な地図のスケッチとテーマに沿ったカードを作るために、地理的な言語を利用する。

複数の資料(地図作成の、衛星の、写真の、芸術・文学の)から、地理的な情報を抽出する。

初等学校3年生の修了時における学習の目標

方位測定

- 基準点を通してどちらを向いているのかを知り、空間を認識するもの(上、下、前、後、左、右など)を利用することで、周りの空間の中で自覚的に動く。

頭の中の地図

- 自身の頭の中の地図を頼りにして、動いたり、位置を確かめたりしているという自覚を獲得する。頭の中の地図は、少しずつ周りの空間を探索することで、構成・拡大するものである。

地理的言語

- 縦の遠近法で知っている対象や領域(教室、自分の家の部屋、学校の中庭など)を表現し、周りの空間における道筋を表現する。
- 定まった基準点に自分をおいて、身近な空間の地図を読み、解釈する。

地形

- 方角を認識したり、直接観察したりすることを通して、身近な領域を探索する。
- 地形の様々な種類を特徴付けている自然の要素と人為的要素を特定する。
- 自分の居住地や州を特徴付けている自然の要素と人為的要素を知り、記述する。

初等学校の5年生修了時における学習の目標

方位測定

- コンパスと四方位基点を利用して、空間と地図上で位置を確かめる。

頭の中の地図

- 間接的に観察できる道具(映像化されたものと写真に取られたもの、地図作成の文書資料、衛星の映像など)を使って、自身の頭の中の地図をイタリア内とより遠い場所に拡張する。

地理的言語

- 多様な尺度の地図を、テーマ図、グラフ、衛星の映像を解釈することで、地域と世界の実事と現象を分析する。
- 自然上と行政上の地域の位置をイタリアの地図上で特定する。

地形

- 類似と相違を特定すること(過去の社会・歴史的な見取り図との関係においても)で、イタリアとヨーロッパ、世界の地形を特徴付けている要素と、特別な環境的・文化的価値の要素を知り、記述する。

地方

- 特にイタリアの全体状況を学習する際に、地理的地域の多義的な概念(自然の、気候の、歴史・文化の、行政の)を知り、応用する。

領域と地方

- 領域は関連、相互依存する自然の要素と人為的要素によって形成されること、要素のうちの一つに対するある人間の介入が連鎖的に他の全ての人間に影響を及ぼすことを理解する。
- 採用されたな解決方法を分析することと類似した文脈において適切な解決方法を提案することで、自然遺産と文化遺産の保護と有効利用に関する問題を特定する。

第一中等学校の修了時におけるコンピテンス発達の

到達点

生徒は、近くと遠くの領域のシステムを観察・読解・分析する。

自分を取り巻く環境に関する空間上の情報を効果的に伝えるため、地理的概念(例: 立地、局地化、地方、地形、環境、領域、人為的自然のシステムなど)と地図、空間の写真と映像、グラフ、統計データを適切に利用する。

ヨーロッパと世界における基本的な地理の自然の「対象」(山、川、湖など)と人為的「対象」(都市、港と空港、インフラなど)を知って、突き止めることができる

頭の中の地図を頼りにして、行動したり、動き回ったりできる。日常の経験とこれまで得た知識から引き出ししながら、有意義な形で実行する。

ステレオタイプや先入観を克服しつつ、領域上と社会・文化上の文脈に関する多様な知識を用いて、他者と対峙することができる。

地形における重要な自然の要素と歴史上、美学上、芸術上、建築上の緊急事態とを、保護・有効利用すべき自然遺産と文化遺産として認識する。

多様な地理的尺度の領域システムにおける人間の決定と行為に対して予想されうる結果を評価する。

第一中等学校 3 年生修了時における学習の目標

頭の中の地図

- 近所、居住している行政上の地方、イタリア、ヨーロッパ、世界の頭の中の地図を有意義な形で豊かにし、組織する。

- 考古学に関わるような場所、図書館、古文書館において作業する際のいくつか手順や技術を理解する。

地理的概念と知識

- 領域において意思疎通を図ったり、行動したりするために、地理学の論理構造におけるいくつかの概念と要点を知り、理解し、利用する。立地、局地化、地方、地形、環境、領域、人為的自然のシステム。

空間的な論述

- 多様な地理的尺度において、空間的・領域的に明確につながっているものを領域の複雑性の中から特定する。事実の相互依存、現象、要素間の関係。

地理的言語

- 自覚的に四方位基点、尺度、地理上の座標、記号の使用などを利用しながら、様々な地図(地形図から平面球形図まで)を読解・解釈する。
- 地理特有の言語、すなわち地理用語、グラフ、映像(衛星からのもの)、スケッチ、統計データを使うことで、領域システムとの関係を自覚的に読解・伝達する。

地理的想像力

- 地図、グラフ、映像、統計データ、旅行家のレポート、物語ふうのテキストを利用しながら、地理的に正しく一貫性のある方法で、多様な様相の中から遠い(時間的にも)地形と領域システムを「見る」。

地理特有の方法、技能、道具

- 一貫性がある、自覚的な方法で移動するために、道路地図と平面図を読む、公共交通の時刻表を利用する、行程上の距離だけではなく、経済(お金/時間)的な距離を計算する。
- 地理的空間の表現の新しい道具や方法(電子測量とコンピューターによる製図)を利用する。

注

¹ <http://www.istruzione.it> (2010年2月28日確認)

² http://archivio.pubblica.istruzione.it/normativa/2007/dm_310707.shtml (2010年2月28日確認)

(博士後期課程)